

長岡崇徳大学における教育実践能力向上のためのFD活動

倉島幸子 大橋洋子 山崎達枝 熊倉良太 角山裕美子 沼野博子 広井貴子
長岡崇徳大学 看護学部 看護学科 FD委員会

A Project for Improvement of Faculty Development in Nagaoka Sutoku University

Sachiko Kurashima, Youko Ohashi, Tatsue Yamazaki,
Ryota Kumakura, Yumiko Tsunoyama, Hiroko Numano, Takako Hiroi
Nagaoka Sutoku University, Department of Nursing, Faculty of Nursing

要旨：本学が2019年4月に開学して以来、FD委員会の組織的な取り組みとして、公開授業見学、授業評価アンケート、FD研修会、学内教員の研究報告を行ってきた。これまでのFD活動をまとめ、FD研修会として行ったシミュレーション教育と教育評価の講演会について、参加率とアンケート結果をまとめた。シミュレーション教育の講演会では教員が作成したシナリオ（授業計画）を検討したことで演習に取り入れることができ、活動目標の「各領域のシミュレーション教育を推進する」一助になった。教育評価の講演会においても、教員が作成したルーブリックを検討し具体的な作成方法が理解できたことから、実際に看護過程や実習の評価にルーブリックを作成していきたいという積極的な姿勢がみられた。

このようなFD研修会により、教育力の向上を図る意識が高まり、より質の高い教育活動を推進する目標に近づいたと考える。授業評価アンケートおよび公開授業見学のピアレビュー等は、授業改善にどのように活かされているか検討が必要である。

キーワード：FD活動，教育実践能力，シミュレーション教育，教育評価

Keywords : faculty development activities, ability to practice teaching,
simulation education, educational evaluation

I. はじめに

ファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development 以下FD) とは、中央教育審議会 (文部科学省, 2005) によると「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされており、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会などが挙げられている。答申本文では「各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修の実施に努めるものとする」と提言した。これを受け大学設置基準にFD実施の努力義務が加えられた。2007年から

は大学院設置基準にFD実施の義務化が加えられ、学部教育においてもFDを義務規定とするため大学設置基準の改正がされ、2008年4月からは、「実施に努めなければならない」という努力義務が、「実施するものとする」というように実施義務に改められ第25条の3として明記された。また大学評価・学位授与機構における認証評価においても「教育の質の向上及び改善のためのシステム」の適切な運営が基準9として設定された。

長岡崇徳大学 (以下、本学) は「崇徳」の理念をもとに新潟県中越地域に密着した看護専門職者を育成する大学として2019年に開学した。「崇徳」とは鎌倉時代の法然上人の説いた言葉「崇徳興仁務修礼讓」の一説に由来しており、「善い行いを尊び (崇徳) 思いやりの心をおこし

連絡先：〒940-2135 新潟県長岡市深沢町2278番地8
E-mail: kurashima-s@sutoku-u.ac.jp
TEL: 0258-46-6666 (内6605) FAX: 0258-86-6637

(興仁) つとめて礼儀を守り互いに譲り合う(務修礼讓)」を意味する。

大学における看護教育の充実と大学独自の特色ある教育を展開する上で、教育実践能力の向上は重要な課題である。教員の資質向上を目指し開学時からFD委員会が発足し、組織的な取り組みとして教員相互の公開授業見学(ピアレビュー)、授業評価アンケート、教員研修会、学内教員の研究報告などのFD活動を継続してきた。本報告ではこれまで実施されてきたFD活動内容をまとめ、教員研修会として行ったシミュレーション教育と教育評価についての講演

会に焦点をあて、FD活動が有効に活用されているか評価し今後の課題を検討する。

II. 開学時から現在までのFD活動

FD委員会の活動目標は、1. より質の高い教育活動を推進し教育力の向上を図る 2. 教員の研究活動を推進し研究力を高める 3. 各領域のシミュレーション教育を推進する(2020年に追加)である。この目標達成に向け各年度ごとに活動計画を立てFD活動を行った。活動概要を表1に示し、年度ごとに活動内容と結果について述べる。

表1. FD活動概要

年度	開催月	活動内容	参加者数(参加率)
2019	4月	1) 教員へのFD企画ニーズ調査	22名(100%) 22名(100%) 20名(90.9%) 17名(77.7%) 22名(100%) 22名(100%) 事務職16名 17名(77.7%)
	5月	2) FDマップの作成	
		3) 公開授業・見学の計画、実施	
		4) 授業評価アンケート実施	
		5) 教員研修会の企画・運営	
	8月	第1回研修会「シミュレーション教育講演会」北嶋裕子氏	
2020	9月	第2回研修会「災害教育におけるシミュレーション教育の実際」山崎達枝氏	26名(96.2%) 26名(96.2%) 26名(96.2%)
		第3回研修会「地域包括ケア学習会」 講義「地域包括ケアとは」平澤則子氏 講義「こぶし園における地域包括ケア」吉井靖子氏 ・グループワーク「地域包括ケアを学生にどう伝えていくか」	
		第4回研修会「教育目標共有化学習会」中村学部長	
		第5回研修会 講演「超少子高齢化社会での私立大学の使命」 山本正治氏(新潟医療福祉大学)	
	3月	第6回研修会 グループワーク テーマ「看護教員として実習における学生の学びを支援するとは何か」	
	10月	1) 公開授業・見学の計画、実施 2) 授業評価アンケート実施 3) 教員研修会の企画・運営 シミュレーション教育講演会(Zoomによる3回の講演)阿部幸恵氏(東京医科大学)	
2021	12月	「看護基礎教育におけるシミュレーション教育の意義、位置づけと流れを理解する」	23名(82.1%) 28名(100%)
	1月	「目標に沿ったシナリオ作成の流れ、ポイントを理解する」 「ブリーフィング、デブリーフィングを実際的に理解する」 学内教員による研究報告を3件実施(9月・12月・3月)	
2022	8月	1) 公開授業・見学の計画、実施 2) 授業評価アンケート実施 3) 教員研修会の企画・運営 シミュレーション教育講演会(Zoomによる講演)阿部幸恵氏(東京医科大学)	29名(93.5%) 29名(93.5%)
	12月	「学生のレディネスを考慮したシナリオ作成と実施」 授業評価に関する講演会(Zoomによる講演)斎藤有吾氏(新潟大学) 「大学における授業評価の必要性と意義」 学内教員による研究報告を2件実施(5月・7月)	
2022	6月	1) 公開授業・見学の計画、実施 2) 授業評価アンケート実施 3) 教員研修会の企画・運営 シミュレーション教育講演会(Zoomによる講演)藤野ユリ子氏(福岡女学院看護大学)	29名(93.5%) 29名(93.5%)
	8月	「VR教材を導入した演習・実習の学習シナリオ設計」 授業評価に関する講演会(Zoomによる講演)斎藤有吾氏(新潟大学) 「ルーブリックの作成と評価」 学内教員による研究報告を2件実施(6月・7月)	

1. 教育力向上に向けたFD活動

【2019年度】

1) 教育力向上のための研修会

開学年度はシミュレーション委員会があり、シミュレーション教育の研修・指導・評価などシミュレーション教育に関することを審議していた。看護基礎教育におけるシミュレーション教育の重要性を考え、シミュレーション教育を推進するための企画をFD委員会で共有し実施した。また開学初年度であるため、FD活動についてどのような希望があるか教員にアンケート調査を行い、FDニーズで必要性の高かった教育力向上のための研修会を企画し、①シミュレーション教育講演会 ②災害教育におけるシミュレーション教育の実際 ③地域包括ケア学習会 ④教育目標共有化学習会 ⑤超少子高齢化での私立大学の使命の講演会を実施した。各研修会ともほぼ全員が参加し、「充実していた」「今後の教育活動に活かせる」との意見が多かった。またシミュレーション教育を進めていく上で必要な基本的知識、演習の展開について共通理解でき、今後各領域で実践するための準備となった。企画数、内容ともに大学教員としての意識向上、教育力の向上に寄与するものになった。また「看護教員として実習における学生の学びを支援する」というテーマでグループワークを行い、今後の臨地実習指導に向けて、「参考になった」「大学の役割・臨床の役割について具体的に考える必要がある」等の意見が出され、活発な討議が行われた。

2) 公開授業見学および授業評価アンケートについて

授業評価アンケートは、質問項目及び方法を検討し講義はWebで回答、演習については用紙で回答するようにし、教務システムが整った後期から開始した。公開授業見学については実施要領を作成し、学内教員が担当する必修科目について授業評価（ピアレビュー）を行った。

年度末にFD委員会活動に関するアンケートを実施し回答率が81.8%と高かったことは、FD

活動への参加率の高さと連動しており、教員のFD活動に対する意識化が図れたと考える。2019年度は教育活動を推進し教育力を高めるための活動を優先したので、教員の研究活動推進のための企画を計画できなかった。

【2020年度】

シミュレーション委員会がFD委員会に吸収され、委員会目標に「3.各領域のシミュレーション教育を推進する」を掲げた。

1) シミュレーション教育のFD研修

2019年度にシミュレーション教育の講演会及びその実際を学んだが、具体的なシナリオ作りや教員の準備が必要で実施するには課題があった。シミュレーション教育を実践していく上で初歩的な内容から実践まで具体的に学ぶために、東京医科大学の阿部幸恵氏に依頼し3回シリーズの講演をZoomで行った。1回目は「看護基礎教育におけるシミュレーション教育の意義、位置づけと流れを理解する」をテーマとした。シミュレーション教育を総論として理解できるように事前に阿部氏の著書を提示し、疑問や質問に対して解説していただいた。一方的でなくアクティブ・ラーニングになるようにしたいという講師の意向を取り入れて進めた。講演後のアンケートでは、〈演習目標の設定やシナリオ、デブリーフィングの在り方で教育の質が左右されること〉〈学習目標を絞り目標達成に向けた授業案作りが大切である〉〈学習者のレベルに合わせた目標が必要で集中できるようにすることが理解できた〉〈ブリーフィング、シミュレーション、デブリーフィングの実際の流れが分かった〉〈タスク・トレーニングとシチュエーション・ベースド・トレーニングの違いが分かった〉〈とても充実した90分だった〉〈阿部先生の講義自体が教員に向けたアクティブ・ラーニングであると感じた〉などの意見がありテーマについての理解が深まり具体的に取り組む準備になった。

2回目は「目標に沿ったシナリオ作成の流れ、ポイントを理解する」のテーマで行った。

3領域から実際に作成したシナリオを提出し、講師からのコメントを受けることでシナリオ作成の流れやポイントをつかむことができた。アンケートの結果、〈学生のレディネスを把握し目標をシンプルにする〉〈学習目標到達のために、演習内容をタスク・トレーニングかシチュエーション・ベースド・トレーニングのどちらにするか決定する〉〈3領域からのシナリオに対し具体的にコメントがあったので、タスク・トレーニングとシチュエーション・ベースド・トレーニングをどのように実施していけば良いかポイントがわかった〉〈実際にシナリオを作成していこうという意欲が持てた〉〈阿部先生がねらいとされたアクティブ・ラーニングとはこのことであり、受講者が参加する形でのFD研修は教員の実力や意欲を高めるうえで効果的であると気づいた〉等があり、シミュレーション教育の実践を進めようとする意欲的な意見が多くみられた。実際に基礎看護学と小児・母性看護学領域のシナリオを提示し、コメントを頂いたことからシナリオを修正でき、よりよいシナリオでその後の演習が実施できた。このように教員が受け身でなく自分たちで考えたシナリオを提示し、助言を受けて修正できたため具体的にシミュレーション教育に取り組むことができた。

3回目は「ブリーフィング、デブリーフィングを実際に理解する」をテーマとした。アナフィラキシー・ショックへの対応のシミュレーション動画を提示され、ブリーフィング・デブリーフィングの場面をみてどこが問題かグループに分かれて討議し発表を行った。アンケートでは、〈動画を通して良くないパターンからファシリテーションで留意すること等を具体的に知ることができた〉〈動画で教員の関わり方をみて自分の関わり方を振り返ることができた〉〈ブリーフィング・デブリーフィングの場面をみてどこが問題かを発表する問題点がよくわかった〉〈Zoomのブレイクスルー機能を活用したグループワークを体験して、同じグループの

教員と阿部先生を身近に感じた〉〈テンポよく状況を見極めたグループワークの進め方が心地よく感じられ見習いたい〉〈実際にその場で体験しているような感覚があり、楽しく積極的に参加できた〉〈教員のアクティブ・ラーニングとはこのことであることを実感した〉〈質問で答えていただいたのでシチュエーション・ベースド・トレーニングとタスク・トレーニングの違いが分かった〉〈学年進行の科目の中で効果的に取り入れていきたい〉などの意見があった。また〈3回にわたる研修を受けて具体的ですぐに活かせる内容だった〉〈シミュレーション教育を領域毎でなく横断的に捉え学科全体で教育の中にどのように取り入れていくかの議論が必要である、各領域でシミュレーション教育を実践していくことが教育の質を高めることにつながる〉など研修の目的や今後の方向性を示唆する意見が示された。3回のシリーズで行ったことは、シミュレーション教育に関する理解を深め具体的に実践していく意欲につながり、主体的な参加を促す方法がアクティブ・ラーニングを実感するものになった。

2) 公開授業見学および授業評価アンケートについて

公開授業見学の実施要領を作成し、学内教員が担当する必修科目について授業評価（ピアレビュー）を行った。学内教員の担当する講義が多くなったこと、次年度からの領域別実習に向け、実習施設との打ち合わせや準備のために前期・後期ともに公開授業見学への参加者は少なかった。

授業評価アンケートはWebによる回答率が低く、学生へのアンケート回答への協力を促した。

年度末に実施したFD委員会活動に関するアンケートの回答率は57.6%であった。記述式であったが、〈シミュレーション教育の研修会が自身の授業実践に大いに役立った〉〈研修会の進め方がアクティブ・ラーニングとなったため主体的に参加できた〉と評価する内容が多かった。

【2021年度】

この年度はFD研修としてシミュレーション教育と大学における授業評価について講演会を実施した。

1) シミュレーション教育のFD研修

前年度に引き続き阿部幸恵氏の講演会をZoomで行った。「学生のレディネスを考慮したシナリオ作成と実施」のテーマで、基礎看護学・小児看護学領域で作成したシナリオを提示し、阿部氏からコメントを受けることにより具体的なシナリオ作成を理解することができた。アンケートでは〈演習で用いる場合、タスク・トレーニングとシチュエーション・ベースド・トレーニングのどちらを選択するとよいか知ることができた〉〈タスク・トレーニングを演習に組み込む方法を学んだ〉〈シナリオ設計において重要なのは、学生が達成できそうで自信が持てるものであるか吟味し、要素を盛り込みすぎないようにすることが最も重要であることが再認識できた〉〈知識や基本的技術の修得にはタスク・トレーニングが適切であり、事前学習が大切で知識の定着を図るには反復学習を促すことが大切である〉〈事前学習で学生の準備を整え学ぶことを習慣づけていくこと改めて考える機会になった〉などテーマの具体的理解が深まりすぐに実践に活かそうとする意識が高まった。また今後シミュレーション教育を推進していく上で、〈シミュレーション教育の実践内容を報告や研究としてまとめるための学習会や授業案の検討会をもてるとよい〉〈本学のカリキュラムの中で、どうシミュレーション教育が実践できているかを検討することが必要である〉などの意見があり各領域でシミュレーション教育を実施する道筋がつけられ、今後の検討課題が示唆された。

2) 授業評価のFD研修

「大学における授業評価の必要性と意義」のテーマで新潟大学の斎藤有吾氏からの講演をZoomで行った。

アンケートでは〈今まで曖昧な理解であった

教育評価、授業評価、学習評価の意味及び意義が明確になった〉〈授業評価は授業内容の改善、教育内容の改善のために行うことが改めて確認でき、教員評価に安易に結び付けないことが大切であると確認できた〉〈授業評価は学生の到達状況を評価することであり教員の指導の分かりやすさを評価するものではない〉〈学生の到達度を評価するために目標に適した評価方法の選択と学習評価の種類について知ることができた〉〈パフォーマンス評価とルーブリックの関係性を知ることができた〉〈ルーブリック評価を取り入れていきたい〉〈到達目標と評価方法が妥当であるか見直したい〉〈カリキュラムマップと合わせてディプロマポリシーとの整合性を早急に見直したい〉〈現在行っている授業評価アンケート、ピアレビュー評価を授業改善に活かしていく動機づけになった〉〈カリキュラムマップを把握したうえで評価できていなかったのが今後活かしていきたい〉〈本学はディプロマポリシーと各科目との関連を検討しているが、今実践している教育の評価を可視化させ、本学のねらいに合致しているか確認していく必要がある〉〈教育改善に結びつく検討方法を具体的にする必要はある〉など授業評価に対する新たな気づきや理解の深まりが見られた。今後の授業改善に活かす手がかりが得られ、大学として授業改善に向けた取り組みの必要性を認識することができた。

3) 公開授業見学および授業評価アンケートについて

公開授業見学の参加者は、前期には多かったが後期は領域別実習が開始されたため授業見学ができる教員が少なかった。公開授業の期間を延長して見学できる機会を多くとるようにした。

授業評価アンケートはWebによる回答率があがらなかったため、各教員に協力を依頼し、最終講義日にWebのアンケートに回答する時間を確保するようにした。

年度末のFD委員会活動に関するアンケート

の回答率は40.7%であった。シミュレーション教育及び授業評価のFD研修は自身の教育活動にとっても役に立ったとする回答が多く、教育実践が発展できるような研修会を今後も継続してほしいとの要望があった。

【2022年度】

FD研修は継続してシミュレーション教育の講演会と授業評価に関する講演会を行った。

1) シミュレーション教育のFD研修

文科省の医療人材養成事業の補助金（オンライン教育やシミュレーション教育をデジタルトランスフォーメーション（DX）の技術を活用して向上させ、新型コロナウイルス感染拡大以前の水準以上の実践的な教育プランを構築し、即戦力となり得る高度な医療人材養成のための経費）の交付を受けVR教材によるシミュレーションシナリオで授業を行うことが企画され、学内DX推進会議とFD委員会の合同企画でFD研修を行うことになった。これを受け福岡女学院看護大学の藤野ユリ子氏に依頼し「VR教材を導入した演習・実習の学習シナリオ設計」のテーマの講演をZoomで行った。アンケートでは「シナリオ設計（授業設計）が重要でありVRはあくまでも一つの教材として考えなくてはならない」〈まず授業設計を明確にすることがわかった〉〈VR教材はシミュレーション教育の手段の一つでありVRがなければ教育ができないわけではないことが明確になった〉〈VRを使用することで疑似体験ができより臨床の現場に近い形で観察や援助について考えることができる〉〈シナリオのカスタマイズ化は実際に自分で計画して実施・振り返りを行わないと分かったとは言えない〉〈遠隔での実習・演習となった場合VR教材はある程度活用できるが、VR教材の操作の理解や技術不足がある〉〈臨床場面の疑似体験が遠隔でも共有できるVR教材は教育目標を達成するために効果的である〉〈具体的な事例で説明されたので実施できると思った〉〈臨床現場からいかに教材をつかみとって提示できるかが重要で何を選択するか教員と指導者の視点

を明確にする必要がある〉〈撮影から行うとなると時間や編集技術などの問題が大きくVR教材を使うまでの教員の準備が大変である〉などの意見があった。また〈VR教材を活用してシミュレーション教育を行うにしても各領域でどのように行ったか情報交換や報告会をもち進めていく段階になった〉〈教育の実践と結果を共有し評価・改善・研究のプロセスが踏めるようにできたら発展していくと思う〉など今後の進む方向を示唆する意見があった。

2) 教育評価のFD研修

前年度に引き続き斎藤有吾氏からの講演会をZoomで行った。前回のアンケート結果で、ルーブリックの作成と適切な評価方法についての要望があったことから、テーマを「ルーブリックの作成と評価方法」とした。基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱと小児看護援助論Ⅱ（グループ演習）についてルーブリック評価表を作成したものを検討し、教員の具体的な理解が深まるようにした。アンケートの結果、ルーブリックの作成と評価について理解できたがほとんどであった。意見として〈ルーブリックの意義・作成の注意点、具体的な作成方法について理解できた〉〈頭の中の評価基準を可視化した表であることが納得できた、主観的な判断を要する場合に適している〉〈複数の教員が関わる場合でもある程度統一した評価ができる〉〈授業内容と一体化することで学ぶ側も自己評価を適切にできる〉〈教員間で判断の差をなくし学生がどのように評価されたかが分かるということがメリットである〉等があった。また、今後どのように活用するかについて〈複数の教員で担当する演習の目標に沿ったルーブリックの使い方や記述表現の改善に活用する〉〈基礎看護学実習Ⅱの評価案について助言を頂いたので再度見直しをしてルーブリックの評価を実行していきたい〉〈小児看護援助論Ⅱの看護過程のルーブリックについて実施・検証されたことは大いに参考になった、基礎看護学の看護過程でもルーブリックを作成していきたい〉〈ディプロマポリシーを意

識しカリキュラム、科目との関連をみながら実習のルーブリックを作成していきたい)などの記載があり実行に向け積極的な姿勢が見られた。さらに、〈学内で作成した素材を用いることが効果的であると実感したので、今後も教員参加のアクティブ・ラーニングとなるようなFD研修がよい〉との要望があった。

3) 公開授業見学および授業評価アンケートについて

完成年次を迎え全学年の科目が開講されたため、学内教員の担当科目が増え、前期後期ともに授業準備や実習の準備に追われて授業見学ができなかった教員が多かった。公開授業の期間を延長して見学できる機会を多くとる工夫をしたが、時間的な余裕がなくピアレビューができた授業は少なかった。

授業評価アンケートは、回答率が上がるように前年度から工夫してきた。2022年度前期は教務システムを用いたWebでのアンケート(講義用)回答率は、58科目中90～100%が10科目、70～80%が12科目で前年度より上がったが、残りの科目は0～50%でばらつきがみられた。一定の回答率が得られるまでに学生への働きかけが必要である。アンケートを用紙で回答する演習や実習科目はその場で回収するため回答率は90%台であった。これらの科目は2019年から概ね90～100%で回答率は高い。

2. 研究力向上に向けたFD活動

教員の研究力向上のために、学内教員による研究報告を2020年度より開始した。多くの教員が参加できるように全教員が出席する教授会の前、30分の時間で一人の教員から自分の行った研究について発表し質疑応答を行った。2020年度は3件、2021年度は2件、2022年度は2件の研究報告を行うことができた。お互いの研究を知り刺激し合う機会となり、テーマや研究方法についての気づきや学びがあり、勉強になるので今後も継続してほしいとの希望が多かった。

III. 総括

文部科学省(2021)は「大学における教育内容等の改革状況について」取りまとめを行っている。教職員の資質向上の取り組み状況として令和元年度国公立786大学対象のFDの実施状況は、教員相互の授業参観を実施する大学は403大学(53%)、授業評価を実施する大学は143大学(19%)、アクティブ・ラーニング推進のためのワークショップまたは授業検討会を実施する大学は253大学(33%)であった。専任教員のFDへの参加率は全員参加した大学数は174大学(23%)、4分の3以上が参加した大学数は396大学(52%)であった。スタッフ・ディプロップメント(Staff Development以下SD)の実施状況は、戦略的な企画能力の向上を目的とする内容を実施する大学数は222大学(29%)、マネジメント能力の向上を目的とする内容を実施する大学294大学(39%)であった。

本学のFDは、開設初年度から教員相互の公開授業見学、授業評価アンケートを実施している。また教育実践力向上のためにシミュレーション教育や授業評価の講演による研修会を実施し、教育実践に活かしている。4年間のFD研修会への参加率を表1よりみてみると、100%が5回、90%台が6回、80%台が1回、70%台が2回で、令和元年度国公立786大学対象の結果と比較すると高い参加率であった。

シミュレーション教育の講演による研修ではタスク・トレーニングやシチュエーション・ベースド・トレーニングの違いが分かり、演習でどう行おうか各領域でシナリオを作成し実際に取り組むことができた。シミュレーション教育の講演を4回にわたり同じ講師が継続したことから実践に向けた疑問や質問が多く出され、具体的に答えてもらうことで教員の積極的な参加が促され教員自身がアクティブ・ラーニングを体験できた。この体験は学生のアクティブ・ラーニングを推進する上で活かされると考える。したがって受け身で講演を聞くのではなく、教員が積極的に参加する研修の方法はFDの効果を上

げたと考える。

授業評価の講演についても2回とも同じ講師が継続したことから、1回目では十分理解できなかった疑問や質問、次回への要望を伝えることができた。2回目の講演はルーブリック使用のメリット、必要性、学習成果・教育成果の把握・可視化についてであった。1回目の講演を聞いてから授業改善につなげようとする教員の意識が高まり、二つの領域でルーブリック評価表を実際に作成し検討することができた。土持(2012)は「ルーブリックは教育者にとって最も便利なアセスメント・ツールの一つであると紹介され、教員の成績評価のための時間を節約し、効果的なフィードバックを導き学生の学習を促進する評価方法である。ルーブリックによる評価は、学生が何を学習するかを示す評価規準と、学生がどのレベルで学習到達しているかを示す評価基準をマトリクス形式で示した定性的な評価指標である」と述べている。2つの領域で実際に作成したルーブリック評価表を検討したことにより、学生が何を学習するか評価基準と学習到達の基準が具体的にわかり、アンケート結果でも、ルーブリックの作成と評価についてはほとんどが理解できた、という結果になったのではないかと考える。

シミュレーション教育と授業評価のFD研修会はZoomによる講演会であったが、受け身でなく、実際に学内の教員が作成したシナリオや評価表を検討することで進めていく方法は、授業計画および授業評価の改善に役立ち、より良い授業を行っていく意欲となり教育実践能力の向上に繋がると考える。また各研修会に向け講演会のテーマと目的を事前に教員に伝え、必要な文献や書籍を紹介して準備を整えたことも教員の主体的な参加を促す上で効果的であった。これより活動目標の「各領域のシミュレーション教育の推進」および「より質の高い教育活動を推進し教育力の向上を図る」については教員の意識化が図れ、一定のレベルに到達したと考える。

IV. 今後の課題と活動の方向性

シミュレーション教育の講演会を開学年次から継続して実施してきたことで、実際にシナリオを作成しタスク・トレーニングやシチュエーション・ベースド・トレーニングの演習を行う領域が増えてきた。今後は各領域で何をどのように行ったかについての情報交換会や報告会をもち、評価をして授業改善につなげること、また各領域でシナリオの共有化・共同利用が図れるよう検討することが課題であると考えられる。

教育評価の講演会についても、実際に実習や演習のルーブリック評価を作成し実際に評価を試みている領域もある。このように講演の内容を実際に取り入れた結果を検討し、より良い教育評価ができるよう各領域で検討し、報告会や情報交換会をもってより良い授業改善につなげていくことが課題である。

授業評価のFD研修会は、FD委員会の活動目標である「より質の高い教育活動を推進し教育力の向上を図る」について、本学のディプロマポリシーと各科目の関連を検討し、現在実践している教育の評価を可視化させ、本学のねらいに合致しているか確認する必要がある。

授業評価アンケートの結果、公開授業見学のピアレビュー等は各教員がどうフィードバックしているかによるが、授業改善につながっているかについても検討する必要がある。しかし授業評価アンケートの回答率が低いため、学生が全員答えるよう回答率を上げること、公開授業に多くの教員が見学に入り、ピアレビューができるようにすることが課題である。

看護教育の内容と方法に関する検討会(厚生労働省, 2011)では、教育の質向上のためには、教員個人の自己評価ばかりでなく、組織的・定期的に全体的な教育の内容及び方法についての評価が必要と述べられている。今回の報告はFD活動がどのように組織的・定期的に実施されたかについてまとめたが、全体的な教育の内容及び方法について評価するまでには至っていない。今後は、よりよい授業の改善ができたか

実践報告をもとに教育を評価するFD研修会が必要である。また初年度に作成したFDマップの教育能力開発の目標に照らし、教育能力の開発がどこまでできたか組織全体で確認することが必要である。将来の大学の姿を見据え、教員一人ひとりが大学教員としてのあり方や教育能力を追及していく相互研鑽の機会が求められる。

引用文献

厚生労働省（2011）：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書，<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>，2022年12月26日入手

文部科学省（2005）：中央教育審議会，「我が国の高等教育の将来像」答申，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm，2022年12月26日入手

文部科学省（2021）：令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について，https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf，2022年12月26日入手

土持ゲーリー法一（2012）：ルーブリックが日本の大学を変えるーポートランド州立大学ダネール・スティーブンス教授の講演を中心に，アルカディア学報，No. 481，https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf，2022年12月26日入手